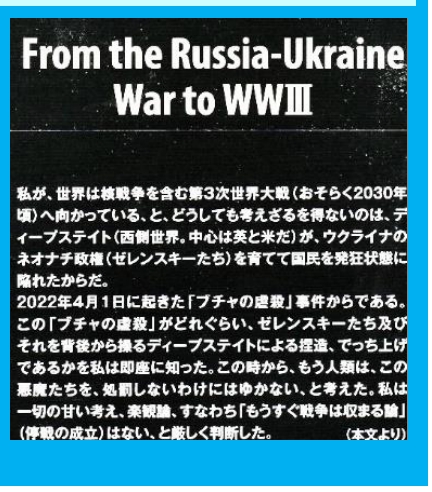
ウクライナ問題に関する志成館館長の作成文書（志成館の生徒諸氏及び興味がある保護者の方々用）

1）副島隆彦氏「ディープステートはウクライナ戦争を第三次世界大戦にする」　2）エマニュエル・トッド「第三次世界大戦はもう始まっている」

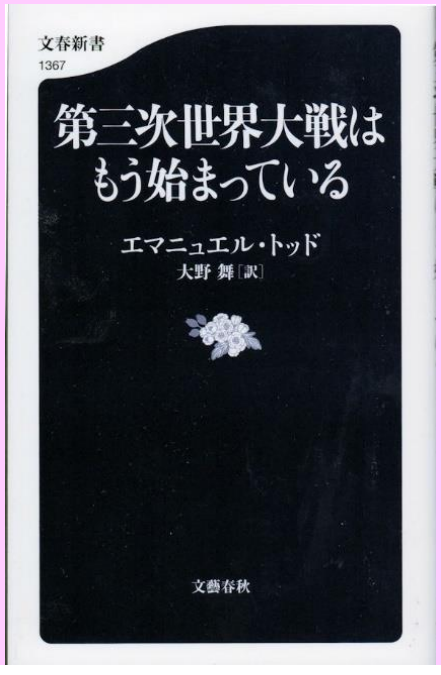
現在のウクライナ問題については、色々な書籍が出ています。しかしウクライナ問題の「真実」をお知りになりたいなら、副島隆彦氏の著作「ディープステイトはウクライナ戦争を第三次世界大戦にする」という名の書籍を参考になさってください。副島隆彦氏さんの２０２２年５月の著作です。また、エマニュエル・トッドさんの「第三次世界大戦はもう始まっている」も参考になります。この２冊はウクライナ問題の本質を見事にとらえています。尚、副島隆彦氏さんの言うところの「ディープ・ステート」とは、アメリカ合衆国を支配する軍事企業すなわち先進資本主義国つまり世界を支配している軍事企業を指します。私は副島隆彦氏さんの書物を読んでおり、それなりに尊敬しているのですが、彼は時には都市伝説論者とか陰謀論者などと悪く批判されることがあるのですが、彼の理解と私の理解が近いのは、二人とも同じ書物を読んでいるからなのかもしれません。

副島隆彦氏さんの言われる「ディープステイト」とは、アメリカ合衆国を支配し、ひいては世界を支配しようとし続けている、「アメリカの官産軍学複合体制の核心部分」を指します。

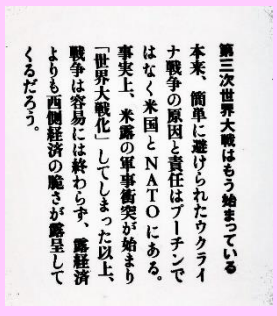


From the Russia-Ukraine War to WWⅢ

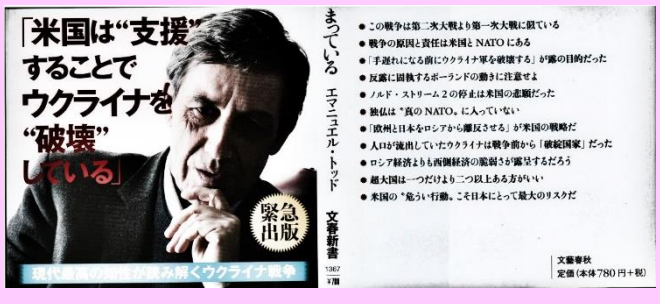
私が、世界は核戦争を含む第3次世界大戦（おそらく2030年頃）へ向かっている、と、どうしても考えざるを得ないのは、ディープステイト（西側世界。中心は英と米だ）が、ウクライナのネオナチ政権（ゼレンスキーたち）を育てて国民を発狂状態に陥れたからだ。
2022年4月1日に起きた「ブチャの虐殺」事件からである。この「ブチャの虐殺」がどれぐらい、ゼレンスキーたち及びそれを背後から操るディープステイトによる捏造、でっち上げであるかを私は即座に知った。この時から、もう人類は、この悪魔たちを、処罰しないわけにはゆかない、と考えた。私は一切の甘い考え、楽観論、すなわち「もうすぐ戦争は収まる論」（停戦の成立）はない、と厳しく判断した。（本文より）

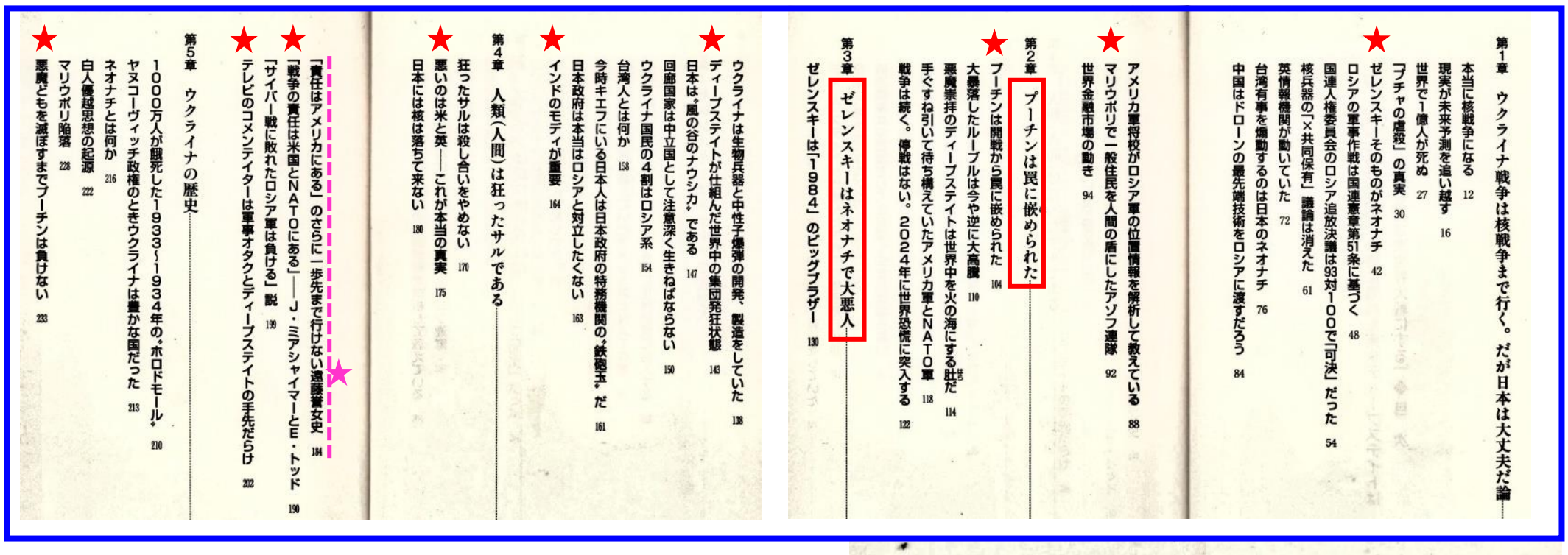


世界最高の歴史家であるエマニュエル・トッドさんさえも、「このような書物を発表するには勇気が必要だ」と述べられています。つまり自由の国のフランスでも、暗殺されるか、社会的に抹殺される可能性があるということです。自由主義社会にも真の自由などないのです。

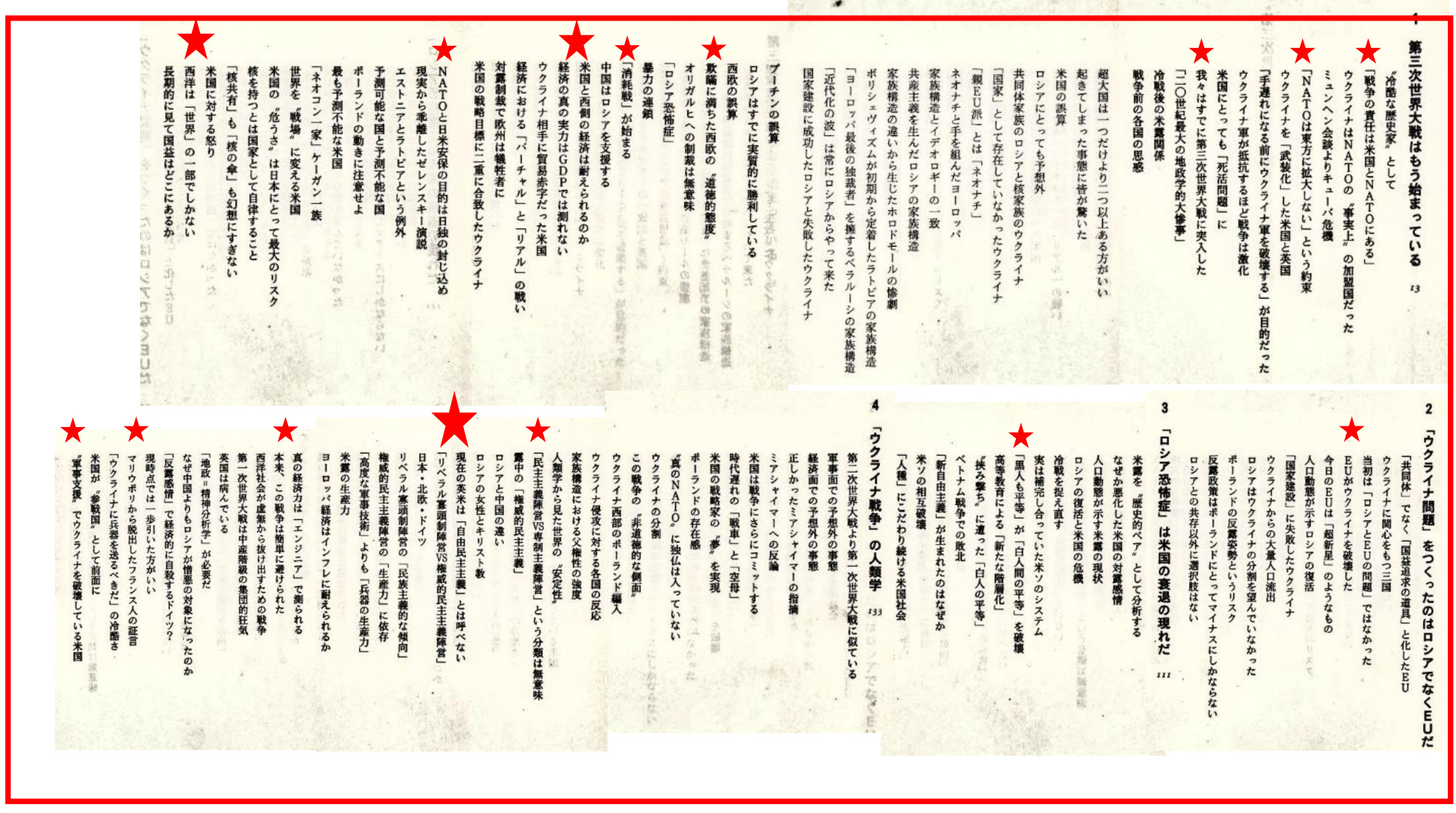


第三次世界大戦はもう始まっている
本来、簡単に避けられたウクライナ戦争の原因と責任はプーチンではなく米国とNATOにある。事実上、米露の軍事衝突が始まり「世界大戦化」してしまった以上、戦争は容易には終わらず、露経済よりも西側経済の脆さが露呈してくるだろう。





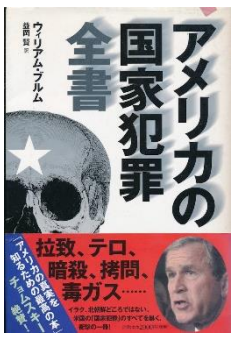
第1章　ウクライナ戦争は核戦争まで行く。だが日本は大丈夫だ論
本当に核戦争になる　12
現実が未来予測を追い越す　16
世界で1億人が死ぬ　27
「ブチャの虐殺」の真実　30
★ゼレンスキーそのものがネオナチ　42
ロシアの軍事作戦は国連憲章第51条に基づく　48
国連人権委員会のロシア追放決議は93対100で「可決」だった　54
核兵器の「×共同保有」議論は消えた　61
英情報機関が動いていた　72
台湾有事を煽動するのは日本のネオナチ　76
中国はドローンの最先端技術をロシアに渡すだろう　84
★アメリカ軍将校がロシア軍の位置情報を解析して教えている　88
マリウポリで一般住民を人間の盾にしたアゾフ連隊　92
世界金融市場の動き　94
第2章　プーチンは罠に嵌められた
★プーチンは開戦から罠に嵌められた　104
大暴落したルーブルは今や逆に大高騰　110
悪魔崇拝のディープステイトは世界中を火の海にする吐だ　114
手ぐすね引いて待ち構えていたアメリカ軍とNATO軍　118
戦争は続く。停戦はない。2024年に世界恐慌に突入する　122
第3章　ゼレンスキーはネオナチで大悪人
ゼレンスキーは「1984」のビッグブラザー　130
ウクライナは生物兵器と中性子爆弾の開発、製造をしていた　138
★ディープステイトが仕組んだ世界中の集団発狂状態　143
日本は“風の谷のナウシカ”である　147
回廊国家は中立国として注意深く生きねばならない　150
ウクライナ国民の4割はロシア系　154
台湾人とは何か　158
今時キエフにいる日本人は日本政府の特務機関の“鉄砲玉”だ　161
日本政府は本当はロシアと対立したくない　163
★インドのモディが重要　164
第4章　人類（人間）は狂ったサルである
狂ったサルは殺し合いをやめない　170
★悪いのは米と英――これが本当の真実　175
日本には核は落ちて来ない　180
★「責任はアメリカにある」のさらに一歩先まで行けない遠藤誉女史　184
★「戦争の責任は米国とNATOにある」――J・ミアシャイマーとE・トッド　190
★テレビのコメンテイターは軍事オタクとディープステイトの手先だらけ　202
第5章　ウクライナの歴史
1000万人が餓死した1933～1934年の“ホロドモール”　210
ヤヌコーヴィッチ政権のときウクライナは豊かな国だった　213
ネオナチとは何か　216
白人優越思想の起源　222
マリウポリ陥落　228
★悪魔どもを滅ぼすまでプーチンは負けない　233

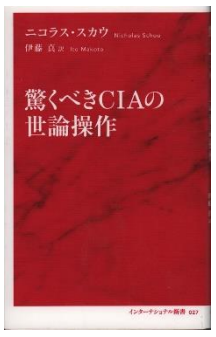


1　第三次世界大戦はもう始まっている　13
★“冷酷な歴史家”として
★「戦争の責任は米国とNATOにある」
ウクライナはNATOの“事実上”の加盟国だった
ミュンヘン会談よりキューバ危機
★「NATOは東方に拡大しない」という約束
ウクライナを「武装化」した米国と英国
「手遅れになる前にウクライナ軍を破壊する」が目的だった
ウクライナ軍が抵抗するほど戦争は激化
米国にとっても「死活問題」に
★我々はすでに第三次世界大戦に突入した
「二〇世紀最大の地政学的大惨事」
冷戦後の米露関係
戦争前の各国の思惑
超大国は一つだけより二つ以上ある方がいい
起きてしまった事態に皆が驚いた
米国の誤算
ロシアにとっても予想外
共同体家族のロシアと核家族のウクライナ
「国家」として存在していなかったウクライナ
「親EU派」とは「ネオナチ」
ネオナチと手を組んだヨーロッパ
家族構造とイデオロギーの一致
共産主義を生んだロシアの家族構造
家族構造の違いから生じたホロドモールの惨劇
ポリシェヴィズムが初期から定着したラトビアの家族構造
「ヨーロッパ最後の独裁者」を擁するベラルーシの家族構造
「近代化の波」は常にロシアからやって来た
国家建設に成功したロシアと失敗したウクライナ
★プーチンの誤算
ロシアはすでに実質的に勝利している
西欧の誤算
★欺瞞に満ちた西欧の“道徳的態度”
オリガルヒへの制裁は無意味
「ロシア恐怖症」
暴力の連鎖
★「消耗戦」が始まる
中国はロシアを支援する
★米国と西側の経済は耐えられるのか
経済の真の実力はGDPでは測れない
ウクライナ相手に貿易赤字だった米国
経済における「バーチャル」と「リアル」の戦い
対露制裁で欧州は犠牲者に
米国の戦略目標に二重に合致したウクライナ
★NATOと日米安保の目的は日独の封じ込め
現実から乖離したゼレンスキー演説
エストニアとラトビアという例外
予測可能な国と予測不能な国
ポーランドの動きに注意せよ
最も予測不能な米国
「ネオコン一家」ケーガン一族
世界を“戦場”に変える米国
米国の“危うさ”は日本にとって最大のリスク
核を持つとは国家として自律すること
「核共有」も「核の傘」も幻想にすぎない
米国に対する怒り
西洋は「世界」の一部でしかない
長期的に見て国益はどこにあるか
2　「ウクライナ問題」をつくったのはロシアでなくEUだ
「共同体」でなく「国益追求の道具」と化したEU
ウクライナに関心をもつ三国
当初は「ロシアとEUの問題」ではなかった
★EUがウクライナを破壊した
今日のEUは「超新星」のようなもの
人口動態が示すロシアの復活
「国家建設」に失敗したウクライナ
ウクライナからの大量人口流出
ロシアはウクライナの分割を望んでいなかった
ポーランドの反露姿勢というリスク
反露政策はポーランドにとってマイナスにしかならない
ロシアとの共存以外に選択肢はない
3　「ロシア恐怖症」は米国の衰退の現れだ　111
米露を“歴史的ペア”として分析する
なぜか悪化した米国の対露感情
人口動態が示す米露の現状
ロシアの復活と米国の危機
冷戦を捉え直す
実は補完し合っていた米ソのシステム
★「黒人も平等」が「白人間の平等」を破壊
高等教育による「新たな階層化」
“挟み撃ち”に遭った「白人の平等」
ベトナム戦争での敗北
「新自由主義」が生まれたのはなぜか
米ソの相互破壊
「人種」にこだわり続ける米国社会
ウクライナの分割
この戦争の“非道徳的な側面”
ウクライナ西部のポーランド編入
ウクライナ侵攻に対する各国の反応
家族構造における父権性の強度
人類学から見た世界の“安定性”
★「民主主義陣営VS専制主義陣営」という分類は無意味
露中の「権威的民主主義」
ロシアと中国の違い
ロシアの女性とキリスト教
★現在の英米は「自由民主主義」とは呼べない
「リベラル寡頭制陣営VS権威的民主主義陣営」
日本・北欧・ドイツ
リベラル寡頭制陣営の「民族主義的な傾向」
権威的民主主義陣営の「生産力」に依存
「高度な軍事技術」よりも「兵器の生産力」
米露の生産力
ヨーロッパ経済はインフレに耐えられるか
★真の経済力は「エンジニア」で測られる
本来、この戦争は簡単に避けられた
西洋社会が虚無から抜け出すための戦争
第一次世界大戦は中産階級の集団的狂気
英国は病んでいる
「地政＝精神分析学」が必要だ
なぜ中国よりもロシアが憎悪の対象になったのか
「反露感情」で経済的に自殺するドイツ？
★現時点では一歩引いた方がいい
マリウポリから脱出したフランス人の証言
「ウクライナに兵器を送るべきだ」の冷酷さ
米国が“参戦国”として前面に
★“軍事支援”でウクライナを破壊している米国
4　「ウクライナ戦争」の人類学　133
第二次世界大戦より第一次世界大戦に似ている
軍事面での予想外の事態
経済面での予想外の事態
正しかったミアシャイマーの指摘
ミアシャイマーへの反論
米国は戦争にさらにコミットする
時代遅れの「戦車」と「空母」
米国の戦略家の“夢”を実現
ポーランドの存在感
“真のNATO”に独仏は入っていない
ウクライナの分割
この戦争の“非道徳的な側面”
ウクライナ西部のポーランド編入
ウクライナ侵攻に対する各国の反応
家族構造における父権性の強度
人類学から見た世界の“安定性”
★「民主主義陣営VS専制主義陣営」という分類は無意味
露中の「権威的民主主義」
ロシアと中国の違い
ロシアの女性とキリスト教
★現在の英米は「自由民主主義」とは呼べない
「リベラル寡頭制陣営VS権威的民主主義陣営」
日本・北欧・ドイツ
リベラル寡頭制陣営の「民族主義的な傾向」
権威的民主主義陣営の「生産力」に依存
「高度な軍事技術」よりも「兵器の生産力」
米露の生産力
ヨーロッパ経済はインフレに耐えられるか
★真の経済力は「エンジニア」で測られる
本来、この戦争は簡単に避けられた
西洋社会が虚無から抜け出すための戦争
第一次世界大戦は中産階級の集団的狂気
英国は病んでいる
「地政＝精神分析学」が必要だ
なぜ中国よりもロシアが憎悪の対象になったのか
「反露感情」で経済的に自殺するドイツ？
★現時点では一歩引いた方がいい
マリウポリから脱出したフランス人の証言
「ウクライナに兵器を送るべきだ」の冷酷さ
米国が“参戦国”として前面に
★“軍事支援”でウクライナを破壊している米国

私が国際政治関係について、上掲のような見解を支持するようになった経緯を示す書籍の紹介です
前提となっているのは、❶世界中のすべての人間を平等に尊敬し　❷すべての人たちが衣食住に困らない世界をつくること　❸地球環境が人類の存続を許さなくなった現在では「国益」など考えず、国境がない世界を実現する必要があるという認識です

アメリカ合衆国の自由や人権擁護の姿勢を信じていた私が、アメリカ合衆国を疑いだしたのは、パレスチナ問題に関する国際連合の議決で、アメリカ合衆国とイスラエルが考えられないようなひどい行動をしていることを知った時からです。その後ウイリアム・ブルム氏の下記の本に出会い、恐るべきアメリカの実体を知った時からです。

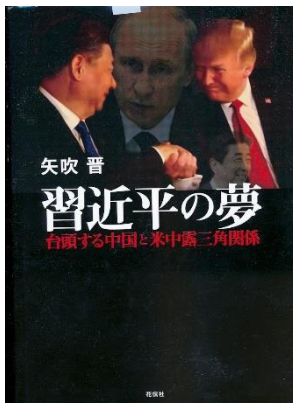


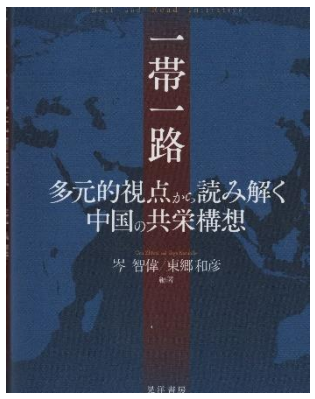


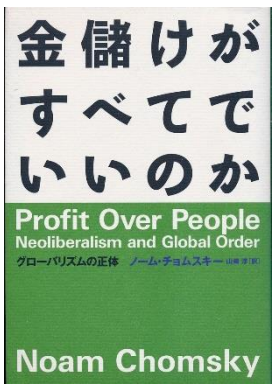
その後に、ノーム・チョムスキー博士に書籍に出会い、善良で誇りと美徳を備えた個性と、誇り高い人権感覚に感動して以来、今日まで彼を敬愛して、現在まで学習を続けています。

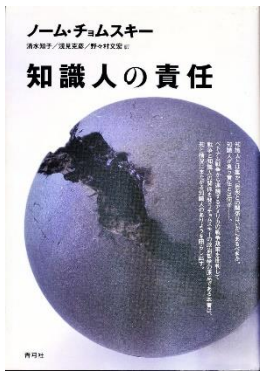
★★★アメリカを中心とする欧米先進国は、中国やロシアのような社会主義国家を憎み、同時にイスラム国家をも憎んでいます。なぜだかわかりますか？それは欧米諸国が個人の自由を最優先するのに対して、共産主義や社会主義そしてイスラム諸国家は、基本的に共存共栄を図り、個人だけが幸せになることを良しとしない国家だからです。エマニュエル・トッドさんは上掲の本で「家族論」という立場からこのことを述べられていますが、私は単純に、アングロサクソンを中心とする諸国家は「強欲すぎる」のであると考えています。その理由はカルバン主義に根差しているからであるという理解です。なぜカルバン派プロテスタントがヨーロッパで急速な支持を得られたかを考えてください。かれらこそが「強欲である人間」を立派だと認めたからなのです。

【下】の４冊は中国の夢と理想を述べたものです。馬鹿にしないで読んでみませんか。

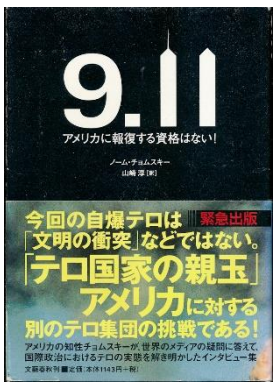


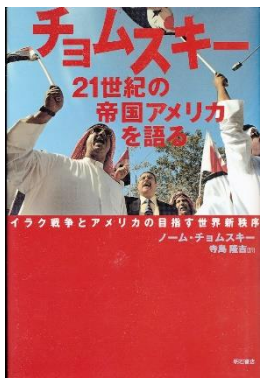


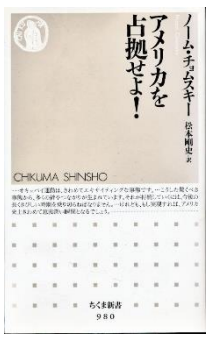


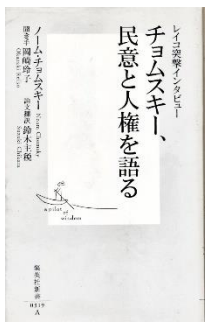


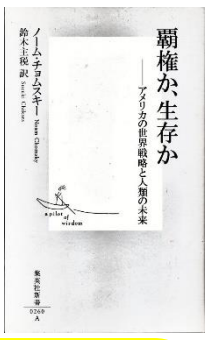
【下】は現在ウクライナで闘っておられるプーチンさんに関する書籍です。右側の本はイギリス人の著作ですが、ゴルバチョフさんがいかにアメリカに騙され、エリツィンさんがいかにして欧米にロシアの富を奪われたかがとてもよくわかり、人によっては「プーチンさんを応援したくなると思います。(笑)。この本の主役であるアレクサンドル・ドゥーギンさんの娘のダリアさんが、最近自動車もろとも爆殺されたのです。

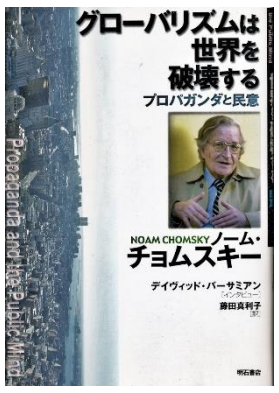


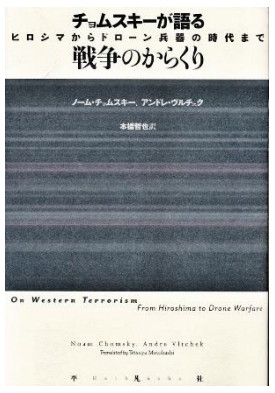








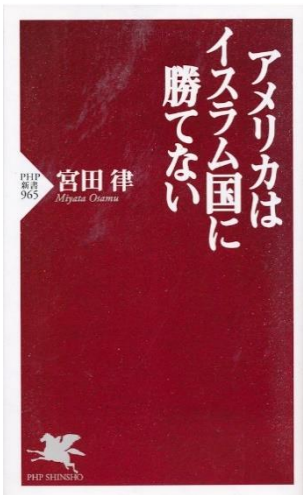


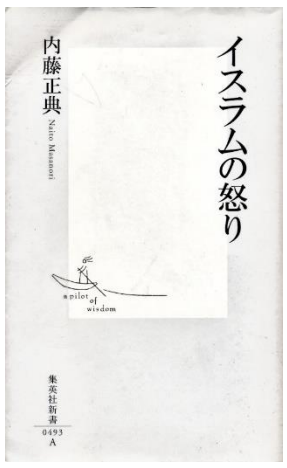


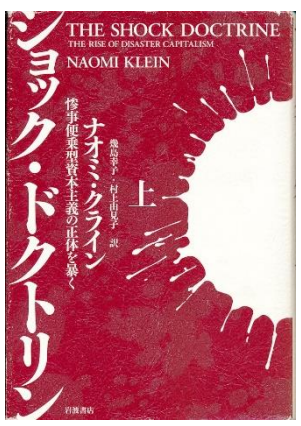
【下】ノーム・チョムスキー博士が前書きをしている下記の「人道的帝国主義」という本は、資本主義先進国に住む人たちの必読の本になりますし、彼のアメリカの民主主義の破綻を述べた「アメリカンドリームの終わり」は、現代史そしてウクライナ問題の理解にとても役に立つと思います

【下】１９７０年代後半のイラン革命の時に、指導者のホメイニ師が欧米諸国を「欲にまみれた醜い人間である」という意味の言葉を発されたことがあるのですが、その当時の私は、全くその通りで、勇気がある発言だと感心していたのですが、「イスラムの教え」についてもっと尊敬し学ぶ必要が欧米人にはあると思います。右の本は素晴らしいものですよ。

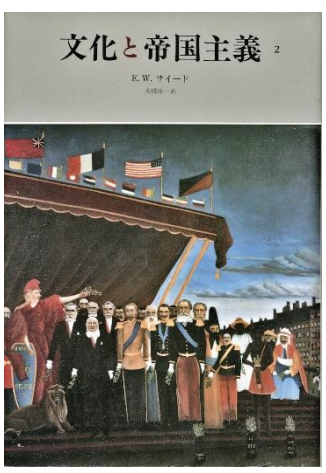
ノーム・チョムスキー博士を慕う人たちは世界中にたくさんいます。そのうちの一人に、カナダのナオミ・クラインさんがいます。彼女の下記の本を読んでいる時に「私でもこの本は書けるし、これこそ私が書きたかった本だ」と強く感じました(笑)。



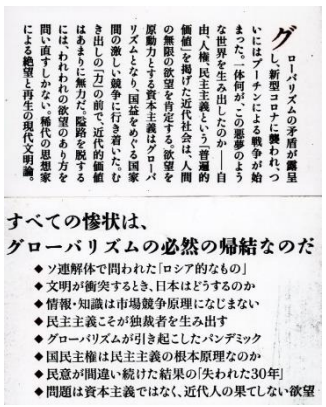


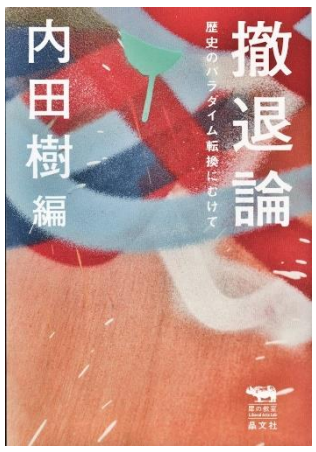


【右】植民地として支配された側からの視点での見解を「オリエンタリズム」と呼ぶことがあります。世界が誇る知識人の一人であるであるエドワード・サイードさんの書籍を参考に。

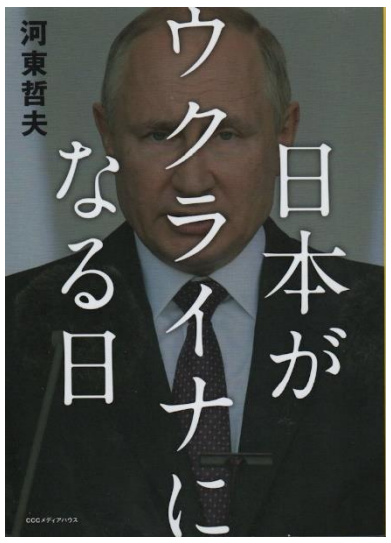


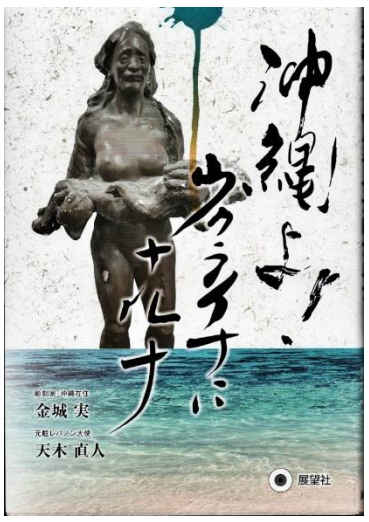
【下】「撤退論」：資本主義社会はもはや維持できないという視点からの本が大量に出版され始めました.カール・マルクスの唯物史観という見地からの理論と対比して、後日自分用に編集しようと思っています.

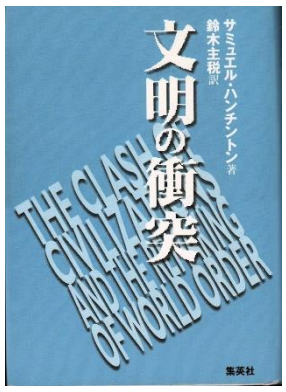


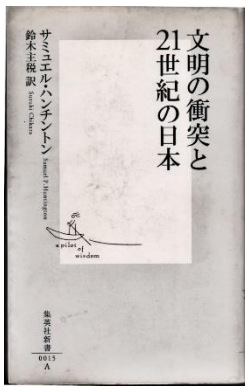


【下】ウクライナ問題に関する比較的新しい文献で、前回のテーブル会で遠藤誉さんの「ウクライナ戦争における中国の対ロシア戦略」を使用しました。二つの本の共通点はバイデンさんのアメリカのひどい政策への批判です。



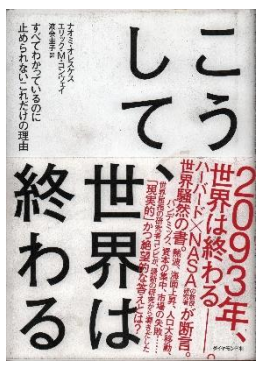


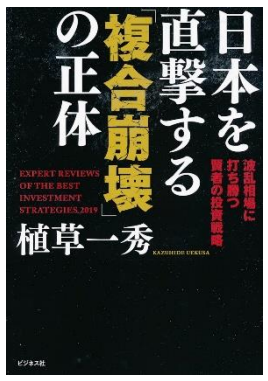


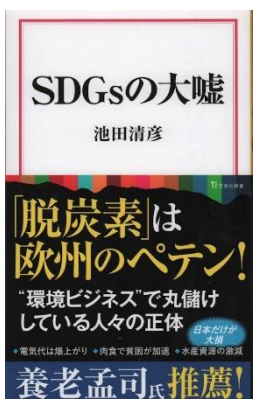


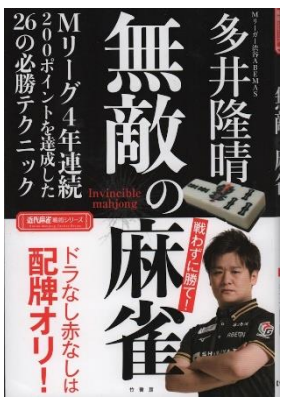
【左】８億人対３２億人の、地球全体での戦いになると、アメリカ合衆国一極支配が続いていたここ３０年における評価が変わって、サミュエル・ハンチントン氏の「文明の衝突」が再び脚光を浴びるでしょう。

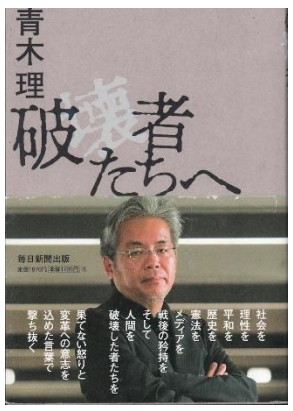
おまけ：読書の秋です、読んでみませんか？　どの本も、読みだすと面白くて、やめられませんよ！！

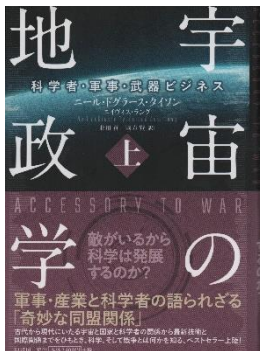


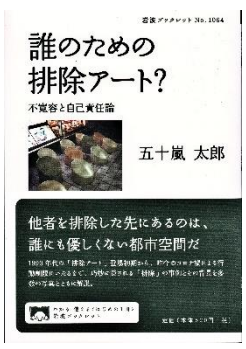








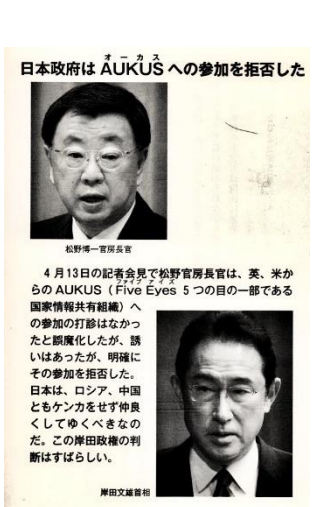




【右】日本はアメリカの言いなりにならないようにという記事が増えています。九電も西部ガスも三菱商事などもロシアとの関係を維持するように腐心していますが、とても良いことだと思います。

【下】バイデンの次男のハンター・バイデンの悪事が国内でばれつつあります。いずれウクライナでのとんでもない悪行がばれる時が来るでしょう.

【下】アメリカ合衆国に騙されて国を滅ぼしたゴルバチョフさんが、死ぬまで社会主義の夢を見ておられたという記事は、その哀れさ故に、私にある種の強い悲しみを感じさせます。プーチンさんは彼への怒りがあると共に、アメリカ合衆国に対する怒りの炎が燃え続けるでしょう。



【左】「AUKUS に参加しない岸田さんは偉い」という上掲副島隆彦氏の本からの記事です。